

福島・矢祭 子育て町ぐるみ

「平成の大合併」が盛んだった頃、福島県矢祭町の「合併しない宣言」を講義で地元テレビの映像も使いながら、よく取りあげた。

東京新聞 7月30日夕刊1面に、標題のタイトルでその矢祭町が大きく報じられていた。リードから一国内の出生率が1.4人台と低迷する中、毎年国を上回り、年によっては2人を超す町がある。平成の大合併の際、「合併しない宣言」(2001年)をして全国の注目を集めた福島県矢祭町だ。「子どもは町の宝、国の宝」を合言葉に、子育て支援のために身を切る改革を実行。人口5900人の小さな町で、若い世代の産みづらさ、育てづらさを解消する多くの政策が実を結んでいる。

福島・郡山駅からJR水郡線で約1時間半。矢祭町保健福祉センターにある子育てつどいの広場「カンガルーくらぶ」では、4人の母親が談笑したり、子どもたちが木のおもちゃや絵本で楽しそうにしていた。

町は05年に制定した自治基本条例に「『元気な子どもの声が聞こえる町づくり』に努める」と明記。町長らの給与引き下げや町職員の削減など、徹底した行財政改革で財源を捻出。次々と独自の子育て支援策を打ち出してきた。

05年に当時は全国でも珍しかった誕生祝い金制度を導入。第三子に100万円、第四子に150万円、第五子以降は200万円を10年間かけて支給する。第一、二子にも10万円を与える。役場には結婚支援室があり、町民から選ばれたアドバイザーが出会いや婚活をサポート。結婚祝い金(20万円)制度もある。教育支援にも力を入れ、幼稚園と保育園を一元化した「やまつりこども園」の保育料は周辺町村の3分の1、小中学校の給食費も半額程度にした。

07年まで町長を務め、改革を実行した根本良一さん(80)は「(祝い金制度などの)お金だけでは魂が入らない。共働きの夫婦が子育てしやすいようにすることも重要だった」と言う。そこで出勤前や仕事後も役場で用事が済ませられるように、職員の早出・遅出をいち早く導入。窓口業務を午前7時半から午後6時45分まで広げた。こども園も同じ時間帯で子どもを預かるようにした。「仕事を終え、買い物をした後でも、子どものお迎えができる」と根本さん。

(矢祭町役場で、総務省の役人に毅然と対応する根本良一町長の映像を思い出す)

(2018年8月26日)

